

1 調査日 令和5年7月26日（水）

2 調査の概要

(1) 尻無北部地区ほ場整備事業工事現場（東近江市尻無町）

世界的な穀物需要の増加やエネルギー価格の上昇などにより、穀物や肥料原料等の価格高騰が続く中、近年の農業経営は農産物価格の低迷や生産コストの増大という課題に直面している。

滋賀県では、営農コストの低減等を目的に、スマート農業技術の実装支援やICTを活用した栽培サポート技術の開発など、新しい技術によりさらなる効率化を目指すことで、安定した農業生産への取組を支援しているところである。

中でも、尻無北部地区ほ場整備事業は、ほ場の大区画化にあわせて、自動給水栓を全区画に設置し、ほ場への取水をスマートフォンで管理できるシステムを構築するなど、営農コストの低減や省力化、さらには濁水流出防止の強化が図られており、本県におけるほ場整備のモデルとなっている。

については、上記課題に対して現状のほ場整備事業の取組を把握し、今後の営農コスト低減等への検討に係る委員会審議の参考とするべく、調査を行った。



(2) JAグリーン近江オーガニック研究会（蒲生郡日野町河原）

滋賀県では、地球環境にやさしい日本一の環境保全型農業により、持続的で生産性の高い「儲かる」農業の実現を目指しており、生産力を最大限に引き出すための新たな作物や栽培技術等を積極的に普及することで、需要の変化に柔軟に対応し、需要の開拓につながる滋賀の特色ある農産物の生産を推進している。

そうした中で、JAグリーン近江オーガニック研究会では、環境こだわり農業の栽培基準よりもさらに化学肥料・化学合成農薬を削減する方法であるオーガニック栽培により、近江米新品種「きらみずき」を栽培していることから、「きらみずき」のオーガニック栽培の現状について調査し、JAグリーン近江の関係職員および地元農家と「オーガニック栽培における課題」などをテーマとして意見交換を行う県民参画委員会を実施した。



(3) グンゼ守山サーキュラーファクトリー（守山市森川原町）

滋賀県では、平成31年3月に策定した第五次滋賀県環境総合計画において、琵琶湖をとりまく環境の恵みといのち育む持続可能で活力あふれる循環共生型社会を目指して、「いかに環境負荷を抑制するか」という視点だけでなく、人間が「いかに適切に環境に関わるか」といった広い視点から、廃棄物の発生抑制（Reduce：リデュース）と再使用（Reuse：リユース）に重点を置きCO2排出量を減少させるとともに、再生利用（Recycle：リサイクル）によって可能な限り処分量を減少させる「3R」の取り組みを推進しているところである。

そうした中、グンゼ守山サーキュラーファクトリーは、従来の「Take（資源を採掘して）」「Make（作って）」「Waste（捨てる）」という直線型システムのなかで活用されることなく廃棄されていた製品や原材料などを新たな資源と捉え、廃棄物を出すことなく資源を循環させる製造の仕組みを取り入れた最先端の施設として、令和5年4月に竣工した。

については、資源循環型工場の概要や、ある産業から出た廃棄物を別の産業が再利用することで廃棄物の埋め立て処分量ゼロを目指す取り組みについて調査を行った。

